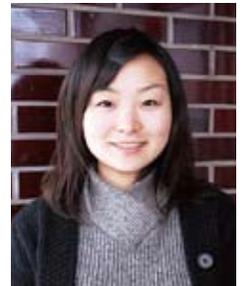


『交流』の先にあるもの 北杜市の挑戦

NPO法人えがおつなげて 小黒 彩香



山梨県北杜市と NPO法人えがおつなげて

山梨県北杜市は、八ヶ岳南麓の8町村が合併して'04年に誕生した。北部に位置する増富地区は標高800〜1200mの山間にあり、過疎化と高齢化が進行している。現在、地域内にある9つの集落すべてが、65歳以上の人口が6割を超えるいわゆる「限界集落」となり、農地の6割以上が使われなくなってしまうという。

私は、3年前に横浜から移住し、「NPO法人えがおつなげて（以下、えがおつなげて）」のスタッフとして、農業や農地などの地域資源を活用した交流活動に取り組んでいる。きっかけは、「えがおつなげて」が行うプログラムへ参加したことがきっかけだ。

「えがおつなげて」は、北杜市（旧・須玉町）と協働で、'04年4月に認定された構造改革特区制度を活用し、増富地区の遊休農地を生かした、地区の農業再

生、都市農村交流プログラム、環境教育など、新しい中山間地域の経済社会モデルづくりに取り組んでいる。かつて遊休農地だった約3ヘクタールを「えがおファーム」と名付け、農産物の生産および都市農村交流を図る各種体験プログラムの場として活用している。

限界集落に住む理由

私が初めて来た時、この集落の農地の約7割が遊休状態で、ススキや木が生え荒れていた。



木の根 vs 男9人

それを全国から集まった延べ5百人の学生やフリーターなどのボランティアや、食品会社等の社員の手によって、畑

に復活させた。現在では、農業・化学肥料を使わずに、トウモロコシ、大豆、増富の特産品である花豆、その他季節の野菜を栽培し、東京の自然食品店などで販売している。

短大卒業後、私は横浜で会社員をしていたが、22歳の時に以前から関心があった国際協力の仕事をするため、民間団体の紹介でタイに渡り、2年半住んでいた。タイの農村地区で、村の人と寝食をともにしながら農業をする中、先進国のために応じて、換金作物を大量に生産したり、本来とは違う時期に収穫できるよう栽培したりするために、大量の農薬や化学肥料を使い、自然に反する農業をしている実態に直面した。最初は、タイの



笑顔がいっぱい！えがおファームにて



農村の人たちのことを「助けてあげなければならぬ人たち」として見ていたが、変わらないといけないのは、都会に住んで、外国の農業の現実を意識せずに消費している自分たちなのだと思付かされた。

そのような思いを抱いて帰国したものの、横浜には農地がなく、どのように農業に本格的に関わればよいかをわからずにいたところを、知人から「えがおつなげて」を紹介され、'04年10月に増富に2週間滞在し、荒れてしまった土地を耕し、畑に戻すボランティアに参加した。

私はこのとき、日本の農村がこんなにも過疎高齢化が進み農地が荒れてしまっているという現状をはじめ知り、日本の食料自給率の低さ、自分給してきた都会での消費生活、自分が見てきたタイの農業の現状、日本の農村の状況が全てつながっていることに気づいた。

また、タイで感じていたような自然の中で体を動か

すことの心地良さを思い出し、増富がとても魅力的な場所だったので、こういう環境に身を置きたいと思った。同時に、このような農村が日本中にたくさんあり、長年培われてきたものが消えつつあることが、とても残念に感じた。けれど、もしそういった地域で、農村と都市との交流を軸にした活動による、地域活性化をしながら自分が生活していけたら、それをモデルにほかの人たちも『やれる』と思えるのではないかと考えた。

翌年「えがおつなげて」のスタッフとなり、婚約していた夫もこの年から活動に加わり、近くにある全国植樹祭跡地の公園で手作りのファームウェディングパーティーを開き、地元の方々や友達、親戚に祝福されこの地に移り住んだ。

これから農村で生活していくためには

これから農村で生活していくためには、ただ農業をやるだけではなく、たくさんある農村地域の資源と、様々な都市のニーズ、人や組織等を様々な形でつな



夫婦で仲良く農作業

げる活動も組み合わせることでやることが必要だと感じている。

例えば、えがおファームには、私たちがだけではなく都会から訪れる多くの人の力によって成り立っている。3年前の開墾に参加した、東京の洋菓子店と南アルプス市の和菓子店社員は、今でも畑に赴き、タルトケーキの原料にするカボチャやサツマイモ、豆大福や豆もちに使う青大豆の栽培に参加している。社員が仕事を離れて、一緒に畑に立つ時間が、チームワークを生むのにも一役買っているらしい。このほかにもこのような企業の畑は、毎年拡大している。

このように、都市住民参加型で農村にある資源を活用することが、農村の荒廃を防ぎ、日本人たちの食に対する考え方を考えるきっかけとなり、発展途上国からの搾取をしない、環境への負荷をかけるない先進国を生み出す力につながっていくのだと思う。これからは資源の活用方法を、多彩なメンバーで創造し、「住む」と決めたこの地域を元気にしていきたい。